東京多摩地区現代俳句協会

# 多摩のあけぼの

会報 No.144

鈴木石夫句集集成

## 『裏山に名前がなくて』を読む

前田　弘

### 石夫俳句の拠り所

「俳句は面白くなければ……とこの頃しきりに思うようになっている。それに、俳句は自由でなければ…とも、しきりに思うのである。俳句の唯一の拠り所（本質）は十七音定形なのだから、その枠内のことであれば、そこで何をやってもよい」。第四句集『史人』の「あとがき」にある石夫の言葉である。

生前、鈴木石夫には『東京時雨』（昭和32年）、『蛙』（同53年）、『鈴木石夫句集（さきたま抄）』（同56年）、『史人』（平成元年）、『風峠』（平成4年）、『煙』（平成12年）の句集があり、未刊句集『裏山抄』を加えて今回の『俳句集成』となった。

鈴木石夫は大正14年6月29日生まれ、平成18年5月31日に永眠されている。享年80。昭和20年、復員後俳句生活をスタート、面白く自由な俳句を希求。戦後60年の俳壇の活きた証人でもある。以下、句集の順を追って石夫俳句の軌跡を辿ってみよう。

**東京時雨の時代**（20～32歳）

串柿の種背信の味がする　　鈴木　石夫

人界になじみ浅くてくしゃみせり

風さびし季節の傾斜いよよ急

風呂屋ゆたかに寒い人間をみな容れる

東京時雨おろおろ歩く母をかばい

作者二十代の作品群である。しかし、どの句にも作者の存在感、風姿が滲み出ている。俳句の世界に自分なりの一石を投じたい。そんな覚悟も垣間見える。「串柿の種」に触れて「暖流」の若手から難解とクレームがつけられたという。そんな時代に先駆けて投じられた一石であった。「東京時雨」からは、作者と一体化した北信濃の風土がそこはかとなく見えてくる。故郷

**多摩風土記（東京都専用線小河内線）**

東京都は小河内ダム（奥多摩湖）の建設資材運搬の鉄道を、JR青梅線終点の氷川（現奥多摩）から水根までの6・7キロに建設した。武田元秀著『ダムと鉄道』（交通新聞社刊）によると、昭和27年の完成から昭和32年7月の運行終了までに百万トンを超える資材を運搬したという。その後西武鉄道に移管、現在は奥多摩工業の所有とされている。（健介）

を離れた東京のいなかもんの複雑な思いが揺曳する。中学教師としても上から目線でなく、中学生と一体化している。

**蛙の時代**（32～52歳）

マラソンの膀胱はもみくちゃである　　鈴木　石夫
男っぽい少女が泣いて卒業す
凄みのあるおでん屋は避け十三夜
「おらは死んじまって」屋上ビアガーデン
魂が抜け駆けをして入学す
鴨三千げにいろいろなことをする
貫之に蛙　やつがれにも蛙

どの句からも石夫の日常感覚が滲み出ている。一句の下の作者名は石夫以外に考えられない。この時期、作者は分かち書きや群作に挑戦をしている。

現世は音楽過剰　遠蛙　　鈴木　石夫
赤ん坊は純粋に泣き　蛙に勝つ
また越したそうでねえか　と伯父の蛙
引越しは後がでえじ　と伯母の蛙
蛙飛び　蛇の疾駆がすぐそこに
後肢から蛙は蛇に吸い寄せられ
徐々に徐々に蛙が蛇の中に入る
彼の蛙　蛇の体内にて溶ける
蛙溶けあたりの風も死んでいる

ストーリー性のある群作、まさに俳諧自由、石夫ワールドだ。

**さきたま抄の時代**（52～53歳）

佛像を捧げる姿態　桃をもぐ　　鈴木　石夫
ははひとり稲刈っている　東唄
雪が降る　くわんのん堂は繭になる

昭和33年10月、「歯車」創立者吉田文夫の引退の後をつぎ、10月以降「歯車」代表となる。「俳句は5 7 5 17音の最短定形詩」である。定形を守り、ポエジーがあればあとは俳諧自由。これが自分の俳句だといえる作品ができるまで継続しなさい。継続は力です。優しそうだが意外に厳しい指導者であった。

**史人の時代**（53～62歳）

畦にどっかと坐りをんなをやめようか
麦秋の　せっせっせえと遊びだす
あかんぼのいみじきわれめ天瓜粉
ぽっぺんと言ってあそんで戦死せり
桃花村たましひ軽く駈けぬける

金子兜太は「俳句の五七五を、定形を、十分に承知しながら、しかも軽やかに扱うとは、言うは易くして容易にできることではないが、鈴木石夫は近来その妙味を発揮しつつある」と評して、石夫は自分の足で確実にライトバースへの道を突き進む。

**風峠の時代**（63～66歳）

生国は赤いりんごに雪が降る　　鈴木　石夫
自転車を担ぎひょいひょい風の峠
流し雛せつなくなって連れ帰る
禅林のへんちくりんの差別語録

ところで、俳句は日本語を母国語として成立する詩であろう。漢字（音読・訓読）、平仮名・片仮名，文語・現代語、歴史的仮名遣い・現代仮名遣い、ルビ、記号、アルファベット等を自在に駆使できる。「風峠」にも新しいルビ俳句が登場。

主権在民か枯野只中銀球娯楽　鈴木　石夫
でで虫の葉渡り　浮雲浮雲
北帰行一瀉千里の麦の秋

## 煙の時代（66～75歳）

鰯雲　サッチャーさんと同い年　鈴木　石夫
隣家まで来た死神に挨拶する
騎馬戦の獅子奮迅は孫娘
豚の子がつぎつぎ生れびびつちやつた
母逝くと虫は知らせてくれざりき
海の日の　海を知らない妣とゐる
毛糸編むとは永遠をまさぐることか
鼠花火に襲はれ命に別条なく

「年齢にふさわしく、もろもろの能書き等はいっさい省いて、きばらず、肩の力を抜いたたのしい作品集になっていればもう何も言うことはい」。石夫の「あとがき」である。ルビ俳句も健在である。

中年的石頭　木華開耶媛が好き　鈴木　石夫
先天的能天気　号泣をして卒業す

## 裏山抄の時代（75～80歳）

陽炎や煙突がへなちょこになる　鈴木　石夫
男梅雨　喜寿といふ字は気味悪い
恋の雀　やつぱり草叢がいい
母の日は神も仏も暇でして
蜘蛛の営巣手伝もせず邪魔もせず
ざくろ落す妻が上手にキャッチする
ヘチマコロンどんぐりもころんころん
雪が降る　お昼は卵かけ御飯
裏山に名前がなくて裏の山
寒紅や都はるみ少し痩せたか

俳句は芸術であってもよい。しかし、芸術でなければならないということはない。俳句は偉くなりすぎてはいけない。俳句の原点は庶民詩である。俳句が好き、俳句を創る人が好き、俳人は単に俳句を創るだけではない。俳句に頂いた縁を生きるのだ。

俳句を創るとき作者の生き方が反映され、俳句を読むとき読者の人生経験が投影される。自分の作品の最初の読者は自分である。最初の読者である自分にフレッシュな感動を与える作品でありたい。俳諧自由、しかし、作品性に関しては自己責任なのだ。

石夫句集集成を読んで、戦後俳句の潮流に改めて触れることができた。たったひとつでも良いから、俳句の世界に一石を投じたい。石夫の想いがひしひしと伝わってくる。

（令和4年5月多摩地区俳句研究会講話）

# あけぼの集

露の世を生きし修羅場が目の当り　東久留米　青村　萌生
秋の夜あつめて河の黒深し　八王子　赤野　四羽
アルバムは昭和の匂ひ処暑の部屋　国分寺　秋山ふみ子
うちの子となりし蟷螂泣くしぐさ　多摩　足立喜美子
跳躍の頂点しづか青嵐　小平　安達　昌代
夏果てる西瓜もうなぎも喰はぬ間に　清瀬　穴原　達治
フル稼働しており古い扇風機　稲城　新井　温子
歩かねば脚は廃用夏落葉　八王子　荒川勢津子
いなびかり一番星をわしづかみ　町田　有坂　花野
持時間なき夕焼に見つめらる　国分寺　安西　篤
月の客忘れてるのに甦る　東久留米　飯田　玉記
百歳の二センチヒール酔芙蓉　多摩　石川　春兎
稲光潜水艦でカウントす　小平　石橋いろり
カーテンを閉めるに惜しき月今宵　練馬　石原　俊彦
黒き身の脇侍訪ねてこぼれ萩　八王子　市川　春蘭
赤ん坊の泣き声激し熱帯夜　青梅　一ノ瀬順子
君だけのとびつ切りの月の出で　狛江　伊東　類
ハグの背に触れる回数夏了る　町田　稲吉　豊

---

ヘップバーンのトレビの泉幾度見し　町田　今田　述
秋祭遠く近くに太鼓の音　町田　宇賀いせを
江戸前を偲びつ渉る盆の東風　武蔵野　内田　牧人
雨蛙秋の衣を着て跳べり　国分寺　越前　春生
金紙のやうな夕焼戦跡地　武蔵野　江中　真弓
汝と我不在の秋の陽がのぼる　府中　大井　恒行
門灯に虫の音細く夜の白む　八王子　大谷みどり
虫鳴くや俺だってなきたいのだよ　日野　大槻　正茂
秋の白湯白を限りの中に入る　立川　大友　恭子
いのこずち大好きだって言ったから　川崎　大西　惠
年輪や製材所には月あかり　三鷹　大森　敦夫
オデーサを発つ貨物船古小麦　昭島　岡崎たかね
麦秋やマトリョーシカの瞳に憂い　武蔵野　岡崎　万寿
太陽の運行通りに生き晩秋　小金井　岡本　久一
倒木や天まで続く蟻の道　三鷹　小川　葉子
耳鳴りの遠くよりしつ蟬しぐれ　飯塚　奥野　亜美
帰郷する仏と子らの盆提灯　昭島　尾関　英正
好感度気になる風のピラカンサ　稲城　門野ミキ子

# あけぼの集

遺されしものつなぐ夏光る川　西東京　金谷サダ子

オクターブ下げてくれないか蝨蜥　日野　亀津ひのとり

かなかなや依頼メールを忘れてる　西東京　河　順子

麦秋が瞼に浮かぶ或る船出　立川　川島　一夫

大文字に想ひ残して帰郷かな　調布　菅　さだを

猿と見る兄住む村の盆の月　清瀬　神崎　幸子

草虱つけて足から老いてゆく　小平　城内　明子

急行の風圧映す早苗の田　町田　菊池美智枝

トマト切る鋭き言葉研ぐように　武蔵野　高坂　栄子

自販機を投身するか缶ビール　西東京　幸村　睦子

雲海に仰向け手足のやわらか　府中　小林　育子

街路樹の通し番号今朝の秋　町田　小山　健介

侵略と暗殺とこの亀虫　立川　今野　修三

オキナワや匙にて崩すかき氷　多摩　斉田　仁

五六粒残るも一房の葡萄　昭島　坂本　空

じりじりと列島染めあぐ熱中症　八王子　櫻本　愚草

蛇泳ぐ時代おくれにならぬよう　東久留米　佐々木克子

宇宙（コスモス）に水の澄みたる地球かな　府中　笹木　弘

---

魔女だった頃は黒髪天の川　調布　佐藤　茉

桃啜る美しき指忙忙し　昭島　佐藤　光子

虹の根は鉄条網の向う側　杉並　島　彩可

抱きついて見上げる孫は医大生　国分寺　島田　澄子

玉の汗男の色気うらやまし　足利　清水　弘一

武蔵野に雲を遊ばせ草の花　小平　下田　峰雄

平凡な日々こそよけれ冬紅葉　西東京　白尾　幸子

馬鈴薯のはるかかなたにコロッケが　調布　白戸　麻奈

吾が胸の血の一滴やアンタレス　世田谷　鈴木　浮葉

迎え火を焚く夕やみに家族の輪　立川　鈴木かずえ

信号を無視して渡る夏帽子　小平　鈴木　寿江

気まぐれな木漏れ日集め曼殊沙華　小金井　鈴木　佑子

白状のひまなく芋の釜茹刑　町田　栖村　舞

青青と夜の満ち来る夏木立　板橋　諏訪部典子

秋たつや訪うた町で川あふる　東村山　瀬尾　恵澄

枇杷むくや毎年語るエピソード　小平　関　梓

風が頬を教えてくれる秋桜　調布　芹沢　愛子

裏返る亀も鳴きたる近江かな　武蔵野　髙野　公一

# あけぼの集

寺の子の朝の読み書き夏休み　西東京　高原　桐
到来の貝が砂はく良夜かな　清瀬　谷村　鯛夢
けっきょくはまた始めから冬椿　国分寺　玉井　豊
蟷螂の青い争いスローモーション　稲城　玉木　康博
龍神のねぶたの前に水をのむ　日野　玉木　祐
手の平を返す別れに散る櫻　大田　田村　實
凱風や赤富士囲むいわし雲　三鷹　田山　光起
兵士見よ雲の切れ間の満月を　八王子　辻　升人
一片の世界に生きてヤブガラシ　八王子　都筑　遊
ビーチパラソルは二人の私室海開き　東村山　寺尾　令子
西へ行く旅の荷軽し秋の水　立川　遠山　陽子
涸沢のビールに溶ける入日かな　西東京　戸川　晟
蜘蛛の糸人差し指が触れたがる　杉並　飛永百合子
ひもじさの歴史を綴る芋の蔓　清瀬　永井　潮
浅茅生のガレにときめく尾根歩き　町田　長澤　義雄
夕ひぐらしかくれんぼの子みな消えて　小平　中條　啓子
遠ざかる蜩の声今日も無事　西東京　中田とも子
遥かなる考の横顔十三夜　国立　中野　淑子
木犀や鏡濡らしてから拭う　府中　中矢　温

---

誰も来ず月下美人の香る夜を　座間　長野　保代
騎馬武者の迎ふる根城（ねじやう）地虫鳴く　武蔵野　夏目　重美
ど忘れの頭をたたく秋扇　町田　成戸　寿彦
黒髪に触れ風鈴の音の密か　国分寺　南行ひかる
お囃子に呼ばる故郷阿波踊　世田谷　西前　千恵
寂しさのしかけのごとく秋の蛇　昭島　西村　智治
昨日より登ったような蝉の殻　多摩　抜山　裕子
藻刈舟池に青空戻したり　三鷹　根岸　敏三
本質はどこに玉葱むいてをり　三鷹　根岸　操
家系図の細る途中の運動会　小平　野口　佐稔
番台の盆梅褒めてジュースの礼　八王子　野澤　勝美
鳴きあいて暁け蜩の波となる　青梅　萩原　芙沙
ひぐらしを序曲に瀬音はやみけり　武蔵野　蓮見　順子
大仏に会いに出かける秋袷　武蔵野　蓮見　徳郎
学食無き下校や案山子に笑われる　羽村　花貫　寥
薄紅葉雨に奪はれゆく色も　日野　日野　百草
頑張れぬ日の銀やんま自在なり　多摩　平山　道子
晩年やオクラの莢を破りたし　八王子　広井　和之
戦争の動画見てゐる敗戦日　調布　藤原はる美

# あけぼの集

棺の蓋な閉ぢそやがて寝待月　練馬　淵田　芥門

こんなにも生きてしまったひぐらしよ　八王子　冬木　喬

ふたりぐらしにすこし疲れて蜆汁　羽村　堀部　節子

庭石のそれぞれに顔鶏来る　羽村　堀部　嘉雄

草々と書き秋風を同封する　国立　前田　弘

青すだれ向き直しても日常　国立　前田　光枝

リラ冷えや友に別れの紅を差す　木更津　松本　まり

変りゆく心のかたち秋の雲　八王子　松元　峯子

秋の湖妖精が起きノクターン　東久留米　三池　泉

炎昼をみちのく球児駆け抜ける　東久留米　三池しみず

線香に火のつきにくい戻り梅雨　東久留米　三浦　禎三

もういいかもっと生きるか半夏生　小金井　三浦　土火

暗号のように向日葵折れている　世田谷　三浦　文子

凌霄花ほたほた予告なき銃弾　町田　三木　冬子

クラス会鮎の旨さのわかる顔　国分寺　水落　清子

ちちろ鳴く京塗師たりし兄の室（むろ）　三鷹　水野　星闇

輸送機の腹見上げをり原爆忌　日野　満田　光生

どこまでもひとりの歩幅山眠る　昭島　宮腰　秀子

手鏡から出られずに母敗戦忌　調布　宮崎　斗士

---

フィレンツェの黄昏ながき薄暑かな　国分寺　武藤　幹

月明りCD奏でるシルクロード　小金井　村井　一枝

全身は抜け穴だらけ汗しとど　熱海　望月　哲土

ハンカチの中へとたたむ虫の闇　三鷹　守谷　茂泰

花木槿朝から時間やわらかい　町田　山崎せつ子

檸檬噛んで見えざるものに身構える　東村山　山﨑美紗緒

誕生日歳は知らぬと豆の飯　府中　山本　徳子

せせらぎに澱むうたかた秋旱　八王子　山本ひまわり

銀漢に胸中吐露する島唄かな　多摩　山本みつし

満月の夜空を走る超特急　調布　豊　宣光

草虱おろかで一所懸命で　稲城　好井　由江

胸奥の朱の行方かな夏の星　三鷹　吉川　真実

満月に抱かるる思ひ退院す　府中　吉澤　利枝

退院を急かして唸る朝の蟬　東大和　吉田雄飛子

年金の減額またか胡瓜もみ　東久留米　吉平たもつ

秋めくやどこかに自分を置き忘れ　国立　吉村春風子

止まらない感染者数鰯雲　日野　依田しず子

丸刈りになつて街路樹夏終る　立川　米澤　久子

城一つ釣瓶落しに呑み込まる　青梅　渡部　洋一

## 秋山ふみ子

**七十七歳菜の花摘んでいる途中**

三浦　文子

年を重ねると心身共に戸惑うことが多くなる。そんな気分をこの句は吹き飛ばしてくれた。一面の菜の花畑はとても明るい。花を摘む作者は少女のように無心だ。その心持に励まされ、心に残る一句となりました。

## 安西　篤

**冷酒酌む父の知らざる齢生き**

吉村春風子

高齢化時代の波に乗せられ、いつの間にか父の享年をはるかに越えてしまった。その分人生を薄めて生きてきたような気もする。暮夜、眠れぬままひそかに台所へ来て、一人冷酒をあおって、ふと口を突いて出る唄―「父よ、あなたは強かった」

## 石橋いろり

**戦争に届かぬ語彙力牛蛙**

芹沢　愛子

作者は語彙力の無さから戦争を止められないと憂えている。今、火薬庫を抱えているのは日本。戦争が廊下の前まで来ているのだ。「言論は暴力より勝る」と信じる作者は、牛蛙でいることへの苛立ち、悲しみを表現したのではないだろうか。

## 石原　俊彦

**冷酒酌む父の知らざる齢生き**

吉村春風子

一昔前まで男性は七十代で亡くなる方が多かった。父上も多分その位だったのだろうか。暑かった日も落ち、晩酌の冷酒を酌みながら、父親の年齢を越え生きている自分の残生を思い、希望と不安の入り混じったかすかな感情が芽生えたのかも知れない。

## 大森　敦夫

**梅雨晴間ぞろぞろと来て測量士**

幸村　睦子

測量は確認する側と、目標を設置する側の共同作業。作業は雨がやんでいる間を狙いたい。作者が静かな時間を愉しんでいると測量士が機材を抱えて大勢やってくる。静から動への動きを「ぞろぞろ」という表現を使ったところに面白みを感じました。

## 尾関　英正

**冷酒酌む父の知らざる齢生き**

吉村春風子

哀愁を感じる一句ですね。「父の知らざる齢」が良い。亡父の年齢を越えた作者の気持には、喜ばしいことでありながら、同時に父の経験しなかった行く末を案ずる一面も窺える。句に溢れる哀愁と上五の「冷酒酌む」がリンクしていて、心に残る一句。

## 門野ミキ子

**柿若葉シルバーカートよく辷る**

平山　道子

シルバーカートは心強いパートナーだが、気配りや押す力だってそれなりに必要だ。初夏、若葉の季節、若葉と言えば柿若葉、光沢のあるつやつやの丸い葉、初夏の象徴だ。カートの動きも軽やか、下五「よく辷る」が柿若葉の明るさと重なる。

## 神崎　幸子

**家庭訪問猫も座に着く畏みて**

松本　まり

家庭訪問は、子ども、母に加えて同居の祖母も緊張します。かつては先生を部屋までお通ししましたが、今は玄関先で済ませることが多いようです。掲句、状況を察した猫まで畏まっているのが面白い。無季ですが四、五月の暖かい日が目に浮かびます。

## 菊池美智枝

**梅雨晴間畝をこしらふ農婦かな**

宇賀いせを

水を含んだ土はさぞ重いだろう。それを掻き寄せる農婦の姿が「畝をこしらふ」に表れている。農民を描いたミレーの絵を観ているようだ。機械化され人の手を削減する昨今、こうした地道な農作業に人の温もりを感じる。

**小林　育子**

**戦争に届かぬ語彙力牛蛙**

芹沢　愛子

戦争への怒りや悲しさを句に詠もうとしても、伝わる句ができないと思うことがある。「語彙力」という言葉が、そのもどかしい想いを強調した。牛蛙のゆっくりとした鳴き声は、時に切ないつぶやきにも聞こえる。静かな反戦句とも。

**佐々木克子**

**薔薇満開庭でいただくローズティー**

三池　泉

以前観た洋画の一場面が浮かんできた。五月晴れの庭で満開の薔薇に囲まれて飲むローズティー。殺伐とした昨今こんな優雅なひとときは何物にもかえられぬもの。豊かな感性あふれる詩や句が次々に生まれるでしょう。うらやましい。

**佐藤　栄子**

**人の手の降らす火の雨麦は穂に**

安達　昌代

今、まさにロシアとウクライナ国境での戦争の画面が浮かんで来ます。火の雨を降らす手も麦を育てるのも人間の手。一つは破壊、他方は実りと相反する行為が同じ人間の仕業。この火の雨が一日も早く止む事を願っております。

**清水　弘一**

**白鳳期のほとけにひとつばたごの花**

足立喜美子

白鳳期の穏やかでふくよかなお顔の白鳳仏。日本人の仏教観や仏のイメージに結びつく。眉間中央の水晶の白毫からの光明はひとつばたごの花が仏の慈悲の吉兆として放たれる。白毫の光から中宮寺の菩薩半跏像や興福寺の阿修羅像へと思いをおよぼす。

**下田　峰雄**

**囀りや笑ひすぎたる春キャベツ**

関　梓

「笑ひすぎたる」には言葉の魔術師とも云えるユーモアに満ちた詩心を感じた。春キャベツの春は季語ではなく新鮮な美味しさを表している、季語の囀りも心地の良い響となっている。作者の豊かな、明るい感性がこの楽しい一句となったのであろう。

**鈴木　浮葉**

**冷酒酌む父の知らざる齢生き**

吉村春風子

私も父より十年も長生きしてしまった。もしまだ父が存命なら、何を話しているだろう。酒好きだった父と酌み交す時間もあるだろうか。今のこの世の中について父は何を語るだろうか。つくづく私はユング派のいう「父の娘」なのだと思う。

**鈴木　寿江**

**絶望のかたちに春の虹かかる**

永井　潮

猛暑日続き、各地での豪雨、コロナも終息せず、世界では戦争、軍事演習の強化等々暗い出来事ばかりです。こんな時代に平和で幸せな春の虹がかかったと云う…。本当に早く平和で幸せな希望に満ちた虹がかかって欲しいものです。

**諏訪部典子**

**戦争に届かぬ語彙力牛蛙**

芹沢　愛子

日本の被爆体験者たちの言葉も、世界の多くの人々の言葉もプーチン大統領の耳には届かないようです。言葉でなく「語彙力」とされたことにより、作者の言葉の無力さを嘆く気持ちが強く伝わってきます。不気味な鳴き声の「牛蛙」がよく効いています。

**瀬尾　恵澄**

**春田打つ死ぬまでここの春田打つ**

斉田　仁

春田打つの繰り返し。死ぬまで、ここの、と句全体から、何があっても私は今の生き方を変えない、という決意を感じます。毎年四季が移ろってもそこで田を打ち、稲を育てるのでしょう。作者は何か辛い経験をしたのでしょうか。

**関　梓**

**夕端居戦争中はと話し出す**
渡部　洋一

終戦の年入学する小学校の校舎は焼失していた。親世代の困窮には及ばないが未就学児だった私の戦争記憶も定着している。創意工夫や人情の機微に満ちたあの昭和時代が懐かしい。作者は今なお曼鑠と昭和を尽きる事なく語られるのでしょう。共感。

**芹沢　愛子**

**痩身を思えり黄泉の渚かな**
大井　恒行

ジャン・コクトーのフランス映画「オルフェ」では黄泉への入り口は鏡だった。「黄泉の渚」とはどんな景色だろう。美しくあれと思う。「痩身」がリアルで切なく作者の悲しみが滲む。

**髙野　公一**

**目が合っただけで金魚に嫌われる**
望月　哲土

目が合ったと思った瞬間に金魚はくるりと向きを変えた。誰にでも経験のあること。「嫌われる」の一語で俳諧になり、共感が生まれる。

**高原　桐**

**梅雨晴間ぞろぞろと来て測量士**
幸村　睦子

雨が上がり何が出て来たのだろうか。梅雨期だと昆虫などを想像する。昔、雪が晴れて子供がぞろぞろ出てくるといった句の記憶があるが、「測量士」の意外性がよい。雨で控えていた測量士達のさあ始めるぞという生き生きとした風情が爽やかに広がる。

**玉木　康博**

**どこまでも過去はあるなり蝸牛**
赤野　四羽

蝸牛は、ゆっくりゆっくり、少し止まっては、二つの触覚で周囲を探り、またとぼとぼと、動きます。人に過去があるようにきっと蝸牛にも過去があります。「どこまでも」という上五が、今そして未来へとの意味を感じさせる共感の句です。

**戸川　晟**

**田植え田に片足いまも置きしまま**
辻　升人

勤めを長くやっていると、退職後も現役の時の苦労が頭にこびりついて離れない事があり、未だに夢に現れる。作者は農業に従事し苦労をしてきた。中でも田植えは一番重要なことで、色々頭を悩ました。それが今も離れられないでいる。

**飛永百合子**

**あじさいの青色が好き空が好き**
宮腰　秀子

あじさいが好きで，切り花をいただいた時にさし芽をしたら二本の内一本が根付き、毎年見事に咲いてくれる。部屋に飾ったり隣り近所にさし上げたりしている。作者はあじさいと空を対比して清々しいひとときをすごし、一句にまとめられた。

**永井　潮**

**明易し鶏抱いて連れ帰る**
中矢　温

場面は目に浮かぶのだが、何故そうなったのかは読み手の想像に委ねている。元気な鶏は抱きにくい生き物である。両手でそれが抱えられているのは、従順なのか、弱っているからだろう。下五は、家出をした少女を引き取ってきた行為にも似ている。

**長澤　義雄**

**青時雨光こぼして鷺の佇つ**
石橋いろり

田や川などの水辺によく見かける鷺が雨に濡れ、じっと佇っていて羽から雨が雫となってこぼれ光っているという景である。発想が独創的で静かな写生句に新鮮味があり、小さな視点から周囲の大きな視野まで想像が広がる。季語の働きが抜群である。

**中矢　温**

**春田打つ死ぬまでここの春田打つ**

斉田　仁

上五の「春田打つ」で、振り下ろされる鍬。そして「死ぬまでここの」の間に、鍬が振り上げられ、下五の「春田打つ」で再び下ろされる。そこにあるのは、これまでもこれからも春田を打つという決意。静かな鍬の音が、力強く聞こえてきた。

**夏目　重美**

**冷酒酌む父の知らざる齢生き**

吉村春風子

いつの間にか父の他界した年齢を超えて生きる作者、刻々と過ぎる父の知らない齢の日々、冷酒酌むにすべての思いが凝縮されています。何気ない日常から人生の万感を詠みきる銘句となりました。

**西前　千恵**

**恋をした夢見て覚めて熱中症**

岡本　久一

コロナ、ウクライナ戦争と何かと暗い話ばかり続いている現在、この句を読んで思わずクスッと笑ってしまいました。作者を思うとなお楽しい気分になりました。どうか熱中症にお気をつけ、くれぐれもコロナとは仲良くなりません様に祈っております。

**抜山　裕子**

**昼寝覚めの母置き去りにされた顔**

宮崎　斗士

夢とうつつの狭間にある時人はふいにいつもは思わぬ不安な気分になる事がある。覚めやらぬ母の目には今何も映らず何も聴こえず誰も居ない。そこで母はハッと気付く。私は置き去りにされたのだ。誰の心にも潜む闇の部分。胸を突かれる一句です。

**根岸　敏三**

**伽羅蕗を好む親父になりにけり**

大森　敦夫

伽羅蕗は酒のつまみに合いますね。毎年生える蕗の茎の筋を取って、砂糖と醤油でじっくり煮詰めた伽羅蕗は日本人の知恵。「伽羅蕗を好む親父」に生活実感があらわれています。お子さんが大きく成長したことも感じられる句です。

**根岸　操**

**映像の侵略者がいる夏座敷**

吉平たもつ

映像の侵略者と言えば、ロシアのプーチンを指しているのだろう。夏座敷には畳の匂い、縁の模様など爽やかなさっぱり感がある。テレビをつける度にウクライナ侵攻の映像が流れる。語らない、感情を抑えた詠み方で、夏座敷が効いている。

**淵田　芥門**

**明易し鶏抱いて連れ帰る**

中矢　温

「ジャックと豆の木」の一こまに非ずも、難解だ。事実上の一章立てだが句切れが障る。下句は言い切り、心情の修辞も詠嘆もないが推敲の上だろう。「曲江」「帰去来辞」の心境か。「鶏を抱く」非日常の所作が隠遁の営みに詩情を潜む。

**前田　光枝**

**今年も妣が先に来ていた夕桜**

堀部　節子

母の年齢に近づくに従い、切ないほど愛しく涙で胸が一杯になってしまうのは私だけではないのですね。折にふれ、母のあの時は聞こえなかった言葉が聞こえてくるのです。明治生まれの母に会いに行こう、きっと今年も先に来ているはず。夕桜の下に。

**松元　峯子**

**調弦の静けさにあり青葉光**

守谷　茂泰

ギターやバイオリン等の弦を、好みの音の高さに調弦する時は、雑音のない静かな空間が欲しい。「調弦の静けさにあり」の措辞が魅力的である。爪弾くギターの音色が聞こえるようであり、青葉光の季語が、美しく句を支えている。

## 三浦　土火

**昼寝覚めの母置き去りにされた顔**

宮崎　斗士

父の戦病死で若くして後家となった母は姑と共に家督を守り、われら兄妹を懸命に育てた。それ程丈夫ではなかった母だったが、九十六歳まで気力で生き抜いた。

六人の兄弟姉妹も既に大方が他界した晩年、ベッドに腰掛け、そんな顔をしていた。

## 宮腰　秀子

**家庭訪問猫も座に着く畏みて**

松本　まり

介護士の訪問だろうか。「お変りありませんか」の声と同時にドアが開く。「ハイ、大丈夫です」の挨拶。そこに猫が現れ家人の横に寄り添うように座る。その情景が猫好きにはたまらなく微笑ましい、畏みて、の措辞が何とも言えない佳句です。

## 宮崎　斗士

**柏餅どこか硬派の息づかひ**

武藤　幹

柏の木の葉は、新芽が出るまで古い葉が落ちないという特性から「家系が絶えない」、さらには「子孫繁栄」と結びついている。しっかりとこの家を引き継ぐ、未来へと繋げる―まさに「硬派の息づかひ」が要求されるところ。共鳴の一句だった。

## 山本ひまわり

**七十七歳菜の花摘んでいる途中**

三浦　文子

幾つになっても花摘む人でありたい。美しいもの輝いているもの優しいものに心寄せる人でいたい。そうであればこそ刺々しさに敏感でいられる。凶々しい世界だけれど花摘むのも人間だからなんとかならんものか。心に響く一句です。

## 吉川　真実

**麦の穂の波輝けど戦地かな**

中條　啓子

天候に恵まれつつも今年度のウクライナの小麦収穫量は半減以下という。自然界の営みは変わらずに麦を育て、豊かな実りをもたらすのに、それを戦争が壊していく。やり場のない憤りと哀しみが麦の穂のきらめきよってより一層痛切に伝わってくる。

## 吉村春風子

**どこまでも過去はあるなり蝸牛**

赤野　四羽

人には誰にでも生を享けてから今日までの過去がある。昨日のことは今日には過去となり、その過去は日いちにちと積みあがってゆく。逆にその過去が増えた分だけ未来は少なくなってゆく。このような輪廻を蝸牛は知る由もない。

# あけぼの便り

○野澤勝美様、前号で私の句に共感を頂き有難うございました。とても嬉しく励みになります。編集部の皆様には日頃のご苦労感謝申し上げます。（荒川勢津子）

○143号市川春蘭さんの「無季俳句考」は骨太な警世観にも充ちた文章で大いに発破をかけられました。（安西篤）

○私を俳句へと導いて下さいました沢田改司様のご逝去の報を、七月九日にお嬢さんから知らされました。コロナ禍で二年半以上お会いしていなかったのが残念でなりません。そちらからも私たちを見守っていて下さい。（一ノ瀬順子）

○いつもお世話様です。この度は俳号に名字をつけて頂きましてありがとうございました。今後ともよろしくお願いいたします。（大谷みどり）

○今年も蝉が鳴きだしました。付近は令和風宅地作りが進んでいて、懐かしいものが一つずつ消えていきます。蝉がいつまで生存できるかは未知です。（奥野亜美）

○飯田玉記様、前号にて私の鯨尺の句にご鑑賞をいただきありがとうございました。古いものへの暖かい共感のお言葉、

とても嬉しいです。　（門野ミキ子）
○すっかり年を取ってしまい、一人で外出ができず悲しいです。　（金谷サダ子）
○雲も風も少し秋めいてきて、頭もようやく俳句脳に戻りつつあり、これから心身ともにリフレッシュして活動するつもりです。　（亀津ひのとり）
○しばらく作句をサボっていましたが、先輩方の句の世界を鑑賞し楽しく拝見しましたので、下手でも続けてゆきたいと思っております。　（河　順子）
○コロナ禍、酷暑の中での編集の方々のご苦労に厚くお礼申し上げます。（城内明子）
○とにかく暑い！今日は吉祥寺で映画などと思っています。　（幸村睦子）
○豊宣光様、前号で私の「刑終えた」の句を取り上げて下さりありがとうございました。ご鑑賞文が気持ちにぴたりときました。　（小林育子）
○熱風の中によろよろと過ごしています。頭はしっかり冷やして俳句すべく老いの身を持ちこたえています。（佐々木克子）
○「多摩のあけぼの」いつも楽しみに待っております。皆様どうぞ御自愛下さいませ。　（佐藤　茉）
○前号岡本久一さんの俳句「恋をした夢見て覚めて熱中症」に脱帽です。鑑賞の一句は、足立喜美子さんのひとつばたごの花を選びました。　（清水弘一）
○昨年から育てている葉牡丹が、茎立した後で花を咲かせたりしながら元気にしています。来年まで元気だとよいのですが。　（白戸麻奈）
○前号の市川春蘭さんの「無季俳句考」を大変興味深く拝読しました。前書きについてのご指摘も貴重なご提言です。　（髙野公一）
○「一句鑑賞欄」初参加ありがとうございます。いつもより丁寧に拝見しました。何とすみずみ迄行き届いているかと驚くばかりです。「アルゴリズム」「エコーチャンバー」など中身を知らない言葉も多く、老いても勉強しなければと反省いたしました。今後ともよろしくお願いいたします。　（高原　桐）
○いつもありがとうございます。沢田改司さんが亡くなられた由、淋しい限りです。氏には色々と教えていただき、青春の日の句のノウハウ迄教えて頂き忘れることのできない方です。今日あるのも先輩の方々のおかげです。安らかにお眠りください。合掌。　（寺尾令子）
○コロナワクチンの四回目の接種は受けましたが、感染者が多くまだ安心できませんね。猛暑の日々、マスクも大変ですが外せません。　（飛永百合子）
○あけぼの集には、私の好きな叙景句も多く掲載されており、毎回興味深く読んでいます。次回はどんな自然詠に出会えるか楽しみです。　（長澤義雄）
○「多摩のあけぼの」の薄さが私には丁度良いです。一字一句見落とすことなく編集後記まで読むことが出来る冊子、心底楽しんでおります。感謝！感謝！でもいつになったらマスクなしの生活になるのでしょうね。この暑さの中ではマスクを取るか、コロナを取るかの状態です。秋は紅葉の中の温泉でゆったりと…夢のまた夢では悲しすぎます。　（中田とも子）
○相変わらず全国の縄文遺跡を訪ね歩いています。この夏から秋にかけて東北各地を巡りました。　（夏目重美）
○初めての投句です。よろしくお願いいたします。俳号は南行（なんぎょう）ひかるです。　（大橋康人）
○コロナの終息はいつの事かと気持ちが重く、ウクライナの戦争はいつ終わるのかと思うばかりですが、俳句の会への出席だけが楽しみです。いつも役員の皆様には感謝の気持ちで一杯です。これからもよろしくお願い致します。　（西前千恵）

○山本徳子様、前号で拙句「紅梅や小さき家を売る話」をご鑑賞いただきありがとうございました。毎朝ＮＨＫラジオ体操して健康に気を付けています。（根岸操）

○行動制限なき夏休みに宰相がコロナ感染するというのは象徴的ですね。国内外の問題にテレビに釘づけです。島彩可様、拙句を取り上げていただきありがとうございました。（野口佐稔）

○中野淑子様、拙句のご鑑賞ありがとうございました。知性、感性に恵まれながらその強い個性ゆえ、師の虚子はじめ周囲の仲間たちに疎まれた久女の孤独感から生まれた寂寥感溢れる数々の句は私の心を揺さぶります。「張りとほす女の意地や藍ゆかた　久女」（藤原はる美）

○清水万ゆ子様、前号では拙句をご鑑賞下さり、嬉しくありがとうございました。八十代の励みにして作句を続けてゆきたいと思います。（堀部節子）

○長いため息の出る昨今です。編集の先生方ありがとうございます。酷暑やコロナから上手に身をかわして下さること、どうかご無事をお祈り致します。（松本まり）

○西村智治様、前々号にて拙句「空蟬はたましいの柩マイナンバー」を選句、ユニークな見立てを加え鑑賞下さっていて嬉しく、遅くなりましたがお礼申し上げます。（三木冬子）

○青木一郎様、拙句「草の餅」を深くご鑑賞いただきありがとうございました。越後の山里育ちでして春には特別な思い出がございます。（水落清子）

○二つの句会の代表をしていますが、毎月、対面か通信かで悩みます。句会は俳句の命なので、コロナ禍とどう付き合っていくか、もっと考えなければいけないと思っています。（満田光生）

○一関なつみ様、１４３号の一句鑑賞で私の「榠樝」の句をお取り上げ頂き有難うございました。地に落ちた一個は喉の薬として蜂蜜漬けにして食べています。（宮腰秀子）

○八月後半、コロナ濃厚接触者として行動制限を強いられ、陰性証明を受け解放後も、大バタバタとなりました。（武藤幹）

○根岸操様、俳句研究会へのお誘いありがとうございます。現在歩行にやや難があり残念ですがもうしばらく休ませてください。（村井一枝）

○年齢のせいか毎日の暮らしに辟易して居ります。皆々様もご自愛くださいませ。（山﨑美紗緒）

○残暑お見舞い申し上げます。この夏は三年ぶりで北海道へお墓参りに帰省し、静岡で夫の母の初盆も無事に終えることができ、ほっとしております。コロナ感染者数は高止まりしていますので今後も十分に気を付けていかねばと思っています。まだ九月に入っても暑い日があるようですのでどうぞご自愛くださいませ。（吉川真美）

○ご心配頂きましたが、やっと杖なしで歩けるようになりました。多くの方々に感謝です。（吉澤利枝）

○リベンジという「蹌踉泉園」吟行会、楽しかったです。ありがとうございました。新型コロナウイルスもロシアの侵攻もなかなか止みません。今日はロヒンギャの惨状のニュースがあり、とても切ない八月下旬です。（依田しず子）

○山崎せつ子様、拙句のご鑑賞ありがとうございました。長年の夢であった猫と住める家に越して来て初めての春の雪でした。窓越しに猫と季節の移ろいを楽しんだり嘆いたりして日々過ごしています。（米澤久子）

○編集担当の方々にはいつもお世話になります。毎日暑い日が続き、熱中症やコロナ禍が蔓延しています。どうぞ御自愛下さい。（渡部洋一）

## 初夏の「蹌踉泉園」吟行会

令和四年六月十一日（土）

発生以来間もなく三年になろうというのに今もまだ疫病は人々を不安に陥れたままです。

我々も月例研究会や吟行等がほぼ中止を余儀なくされてきました。長い我慢の時を経てようやく今年六月十一日に吟行句会を開催することができました。

東京は六月六日に梅雨入りし、当日の空模様も危ぶまれておりました。しかし持参された長柄の傘はハケの坂道で杖となり、大いに活躍したようです。曇り空の下で蹌踉泉園の鬱蒼たる木々の静寂はより深まり、外の喧騒は耳に届かない程の佇まいでした。

暫く園内を散策した後は各々道を選び、三々五々の行動となりました。五、六分坂を下れば野川に行き着きます。閑静な家並みの間を人ひとり分程の幅の小径が続き、寄り添うように一跨ぎできるくらいのせせらぎが流れ下っています。道沿いの家々の庭先に真っ白な花が散見され、その愛らしさに思わず声が上がっておりました。

申し合わせたようにそこここに咲いているので地元の方にお尋ねすると、小学校入学のお祝いに小金井市から希望者に贈られるのだそうです。名は「銀梅花」、花言葉は「愛」、ヨーロッパでは神聖な花とされ「祝いの木」とも呼ばれるそうです。

坂を下りきると野川に行き当たります。昔暴れ川だったそうですが昭和の末に改修されて、流れの中にコンクリートも見えず草木豊かな緑地公園となっています。ゆっくりと楽しみたい水辺です。

句会会場は坂の上です。頑張らねば！

会員外の方を含めて参加者は二十五名でした。二句出句、五句互選、上位十名に賞品、最高得点句は松元峯子さん、永井副会長からの特選賞は稲吉豊さんでした。

（山本ひまわり記）

## 滄浪泉園とはけの道吟行会作品

入選一位

清水汲みしばし言葉を洗いけり　松元　峯子

同二位

人恋ふや暗き森より紋白蝶　根岸　操

同三位

新緑の深き黙切る鳥の声　山本ひまわり

入選

昏がりへ誘ふ石段青葉風　秋山ふみ子

紫陽花や下れば昇るハケの坂　亀津ひのとり

緑陰の歳月重し甃滑る　依田しず子

青楓千年絶えぬハケの水　稲吉　豊

射るやうな視線背後に木下闇　三浦　土火

武蔵野の名水育ち蚊に刺さる　武田　和明

梅雨晴れ間スニーカーを締め直す　石橋いろり

一人一句

濃紫陽花さわられたくて揺れてみる　高野　公一

紫陽花の坂この先は行きどまり　田村たえま

昭和聴く水琴窟に来る藪蚊　野口　佐稔

木堂の揮毫いなさに毅然たり　大森　敦夫

無表情の池の水面に青葉風　笹木　弘

紫陽花の色を変へつつ身を修む　永井　潮

藪陰の風になまめく歯朶若葉　長澤　義雄

老鶯の声に押されて空元気　根岸　敏三

緑陰のハケ見つめたりナルシスト　清水　優子

万緑の選ばれた一葉はけに落つ　戸川　晟

木下闇水琴窟のささめきて　水野　星闇

滄浪の吟行梅雨もひと休み　石原　俊彦

万緑の中悠久の時を水琴窟　西前　千恵

新緑が匂う水音をたしかめる　山崎せつ子

ハケの坂横穴古人も汗にじむ　玉木　康博

# 初夏の「蹌踉泉園」吟行会

初夏の吟行会全員

山本ひまわりさん

根岸操さん

松元峯子さん

蹌踉泉園池

## 第6回　俳句研究会

6月25日（土）立川市子ども未来センター
担当幹事　根岸敏三・秋山ふみ子・
玉木康博・満田光生・大森敦夫・
石橋いろり・山本ひまわり
参加者28名

★講話……市川春蘭 氏「無季俳句考」

籐椅子の座り心地も形見なる　越前　春生
海の色二つに分かる沖縄忌　満田　光生
八月や人を柱と数へたる　櫻本　愚草
残る歯で父の日と云ふ噛めぬもの　稲吉　豊
反抗期なかったように実梅落つ　佐々木克子
真直ぐといふすがしさの夏木立　吉村春風子
万緑の中しばし真空の時間　松元　峯子
はしと打つ老婆手練の蠅叩　三浦　土火
この道は曲らない道桜桃忌　戸川　晟
父の日と言ふてうなぎの贈物　長澤　義雄
後朝の琵琶の余韻や蝉丸忌　大森　敦夫
中央線北岳そびえ甲斐涼し　玉木　康博
老いてなほ知は塵ほどの古書の黴　淵田　芥門
蜘蛛飛んで新天地という次の枝　依田しず子
一つ捨て一つ身軽に夏の夕　関　梓
到来の朝採りコーンをまるかじり　西前　千恵
言い訳の半分聞きし生ビール　笹木　弘
追善の無き兄の忌よ濃紫陽花　水野　星闇
夏木立木陰一枚二百畳　亀津ひのとり
水底の影は可憐にあめんぼう　山本ひまわり
蚊帳を吊る二親留守の六畳間　石橋いろり
枝豆やつらつら話すけふのこと　秋山ふみ子
合歓咲いて時間だんだんやわらかく　山崎せつ子
軽鴨（かる）の子の水尾ひく貌やすがすがし　根岸　操
庭の隅今年も二本ねじれ花　根岸　敏三
雷や融通利かぬ一本気　飯田　玉記
麦畑頭おいかけかくれんぼ　白尾　幸子
露軍戦車牽いて麦刈コンバイン　市川　春蘭

## 第7回　俳句研究会

7月23日（土）立川市子ども未来センター
担当幹事　根岸敏三・秋山ふみ子・
玉木康博・石橋いろり・
関　梓・満田光生・稲吉豊
参加者23名

★講話……吉村春風子 氏
「ウクライナ侵攻下における俳句・短歌・川柳」

審判の声の抜けゆく雲の峰　永井　潮
朝顔やきのふを忘れけふを生く　根岸　操
炎天に電柱の影縮みをり　笹木　弘
夕間暮れ溶けて現る黒揚羽　石原　俊彦
朝顔（あさがお）市抜けて己の歩にもどる　吉村春風子
婀娜（あだ）なまま凌霄の花掃かれをり　山本ひまわり
枇杷むくや毎年語るエピソード　関　梓
藻刈舟池に青空戻したり　根岸　敏三
終活をと思へど夫は蚊帳の外　西前　千恵
寄り道をしてもしなくても狗尾草　前田　光枝
百日紅また用のない人に会い　前田　弘
露草の藍になじんでいる時間　山崎せつ子
長焼きをみんなで分けて土用丑　三浦　土火
国葬が小糞と聞こえる溽暑かな　依田しず子
分断はアメーバーのごと半夏生　石橋いろり
水音のしづかな厨夏のれん　秋山ふみ子
多摩川の河口焦して夕焼くる　長澤　義雄
居ても犬何もなくても蟻の列　稲吉　豊
夏負けと言い二人前たいらげる　飯田　玉記
夏氷ワインで浸す眠れぬ夜　大森　敦夫
骨揚げや蝉啼き泪枯れ果てゝ　淵田　芥門
麦の穂が倒れる平原救え民　玉木　康博
松蝉や土人形の斎庭（ゆにはまひ）舞　満田　光生

## 第40回多摩地区俳句大会

コロナ禍のため会場での大会が開かれなかった多摩地区俳句大会が三年ぶりにいつもの会場で開催されます。

多くの仲間と出会い、会歌を歌い、貴重な講演に耳を傾けるかつての大会が甦りました。皆様のご来場をお待ちしております。

日時　十一月五日（土）午後二時より
会場　武蔵野スイングホール
　　中央線武蔵境駅北口徒歩二分
講演　今野寿美先生（宮中歌会始選者）

## 事務局だより

○当協会のお知らせ等はホームページからもご覧になれます。（蓮見幹事担当）
「現代俳句協会」を検索し、「地区活動」から「関東ブロック」の「都多摩」へと進んでください。

### ★第40回多摩地区俳句大会

日時　令和4年11月5日（土）
会場　武蔵野スイングホール
　　ＪＲ中央線　武蔵境駅北口より徒歩2分
投句　投句は締め切りました。
講演　今野寿美　先生（宮中歌会始　選者）

### ★平成五年度定時総会 並びに陽春句会

日時　令和5年3月12日（日）午後2時
会場　武蔵野スイングホール
　　ＪＲ中央線　武蔵境駅北口より徒歩2分
　（詳細は次号でお知らせします）

### ★会員の現況（9月末現在）

**240名（正会員194名・一般会員46名）**

☆新入会員　2名（敬称略）＊印は正会員
＊杣森　松一（調布市）＊高瀬　多佳子（小平市）

◆多摩地区協へのご入会は、随時受け付けております。現代俳句協会会員で多摩地区に在住の方は、会費は無料（申し込み手続き不要）。それ以外の方は年会費2千円です。お問合せ、ご連絡は事務局（下欄枠内）まで

「多摩のあけぼの」編集担当幹事
関　梓（梓）　満田　光生（光）
飛永百合子（百）　山崎せつ子（せ）
永井　潮（潮）

## ◇◇◇◇◇◇◇ ご案内 ◇◇◇◇◇◇◇

### 俳句研究会

第11回　11月26日（土）午後1時
　立川市子ども未来センター
　立川駅南口徒歩13分
　（とじ込みはがきの地図参照）
　電話042・529・8682
　＊講話　小山健介　氏
第12回　12月17日（土）午後1時
　立川市こども未来センター
　＊講話　津久井紀代　氏
第1回　1月28日（土）午後1時
　立川市こども未来センター
　＊講話　永井　潮　氏
　（いずれも会費五百円、出句三句）

○感染防止を心掛け、体調不良（発熱等）の場合は積極的にお休みください。お出かけ前の検温とマスクの着用をお願いします。

### 〈在宅句会〉（投句参加）

▽開催日の**一週間前**までに投句してください。
▽出句は一人三句です。（選句はありません）
▽**20×3㎝程の短冊**に一句ずつ書いてください。
▽参加費は千円です。（出句時にお送りください）
▽句会終了後、全作品の得点入り清記用紙と高点句、出句された作品の成績、寸評等をリポートとしてお送りします。
（投句先）〒180-0006
　武蔵野市中町3-29-19
　蓮見　徳郎方「俳句研究会」投句係宛

## 編集後記

☆敬老の日に発表された日本人の平均寿命は男八一歳、女八七歳。その最晩年を充実させるには、矢張り俳句を詠み続ける事かなと思う。（梓）
☆嘗て句友でもあった義母が九十歳で他界。計三つの結社で活動するも、脳梗塞で句作不能に。早くに句集上梓を強く勧めるべきだった。（光）
☆一句鑑賞の原稿依頼の担当をしていますが、会員数が減り一人当たりの依頼回数が増えています。届いた方はよろしくお願いします。（百）
☆まだ九月というのに、今日は寒さを感じました。季節の移り変わりに驚いているこの頃です。皆さんに会える楽しみの多い秋です。　（せ）
☆前々号の日野百草さんの文章は反響が大きかったが、前号の市川春蘭さんの「無季俳句考」は百草さんの文章を受けたようなところもあり好評だった。季語のない句を無季句と言っているが、敢えて使わない季不使用句もありか。（潮）
―題字は三橋敏雄氏―

令和四年十月二十七日発行
発行人　吉村春風子
編集人　永井　潮
発行所　東京多摩地区現代俳句協会事務局
　〒181-0015
　三鷹市大沢2-10-7　大森敦夫方
　TEL　090-9389-4821
　FAX　0422-30-0934
印刷所　株式会社　清水工房
　TEL　042-620-2626